

GSID

No. 6

1999. 3. 1

ニューズレター

名古屋大学大学院 国際開発研究科

発行 ④464-8601 名古屋市千種区不老町

☎ <052> 789-4953

FAX <052> 789-4951

GSIDホームページ//www.gsid.nagoya-u.ac.jp

GSID : 1999

大学院国際開発研究科長 中 條 直 樹

一体、何人の人が国際開発研究科（GSID）に在籍する（研究生を含む）留学生について、その員数と出身国を正確に答え得るであろうか。GSIDは1991年4月の発足以来一貫して留学生を積極的に受け入れてきた。発足時の留学生数は、僅かに9名、出身国も中国、ザイール、バングラデシュ、メキシコ、アメリカの6カ国であった。しかし開発専攻、協力専攻、コミュニケーション専攻と研究科を構成する三専攻が次々と整備されるにつれて、留学生も飛躍的に増加し、1999年1月1日現在では、留学生は144名、出身国は40カ国となった。この144名という数は、在籍者総数330名のほぼ5割に達することになる。本年4月からは文部省国費留学生、在外日本大使館推薦の研究留学生、愛知県費留学生、或いは私費留学生として入学、進学し、研究生活のスタートを切る留学生を勘案すれば、おそらく5割の線を越えて、日本人学生との比率は逆転すると思われる。GSIDでは、これまで本研究科への留学を希望し、指導教官の内諾を得ようとする留学生に対して、教官スタッフが出来る限りの協力、或いは手助けをしてきたが、1995年からは留学生担当教官1名を配置し、生活上の、或いは学習上の悩みを抱えている留学生に対する配慮を心掛けてきた。しかし上述した144名という留学生に所期の目的を達成させ、帰国後、専門知識を生かして活躍させ、前期・後期課程を通じて研究に専念させるには、留学生担当教官1名だけの配置では余りにも手薄であった。このため数年前からGSIDは留学生担当教官の増員を要求してきた。

例年の如く年末に次年度の概算要求の結果が内示され、昨年末には留学生担当教官1名の増員が認められたという朗報を受けた。ここに至るまでの文部省をはじめ、名古屋大学当局のご尽力に厚く御礼を申し上げ、可能な限りの早い時期に2人目の留学生担当教官を配置するのがご配慮に酬いることと思う。また、留学生担当教官2名体制を敷くこ

とにより、これまで悩みを抱えながらも時間的な制約により、相談室を訪れる機会のなかった留学生にも面談時間を設けることも可能となろうし、事情が許せば開発・協力に関わる専門日本語の相談にも応じられよう。本年はGSIDにとって留学生支援体制の再スタートとなる。

次にこれまでもGSIDの柱として度々言及した国内実地研修（DFW）について若干触れておきたい。昨年度は愛知県足助町の全面的な協力の下にそれを行い、大きな成果を得た。DFW（実質3日間の短期研修である。）はすでにカリキュラムに組み込まれ、参加希望者も多く、調整に嬉しい悲鳴をあげている。海外実地研修（OFW）共々今後も大切に育んでいきたい。これらに関して昨年7月には、GSID-OFW・DFW公開セミナー『グローバル時代のコミュニティ開発：課題と展望』を開催、これまでの成果をもとに専門家を交え、これからの地域開発について意見の交換を行い、更に12月には、DFW参加者による「グループ報告会」を設定し、大きな反響を呼んだことは記憶に新しい。二つの実地研修の報告書がこの三月末には刊行される予定であり、現在研修担当助手による編集作業が精力的に進められている。是非ご笑覧頂き、GSIDの取り組みにご理解とご支援を心よりお願いしたい。



足助資料館にて 足助町作りの会へのインタビュー

特 集 :

1998年度 海外実地研修 (OFW) と国内実地研修 (DFW)

海外実地研修 (OFW) の概要

梅 村 哲 夫

(海外実地研修担当助手)

海外実地研修 (Overseas Fieldwork = OFW) は、1992年以來、タイ、フィリピン、インドネシアの3ヶ国でそれぞれ連続2年の実習として、6年1サイクルで実施されている。本年度は2サイクル目の初年度で、3度目のタイへの訪問であった。また、今回もチュラロンコン大学の全面的な支援を得て実施された。

OFWは、現地の開発計画や現地事情等を学ぶことを目的とする「事前研修」と、実際に途上国で調査を実践する「フィールドワーク」の2段階で構成される。本年度の事前研修は、チュラロンコン大学、GSIDや他学部教官、JICA専門家、国際開発高等教育機構 (FASID) のスタッフが講師となり実施された。フィールドワークは9月30日から10月18日までの19日間、北タイ・チェンライ県で、4つのワーキング・グループ (WG) に分かれて行われた。なお、事前研修及びフィールドワークの概要及び日程は次のとおりである。

● 事前研修

6/10, 24 タイ経済の概要及び東北タイのマクロ経済について

9/16~19 農村総合開発論、タイ東北部の歴史、タイにおける開発関連諸機関

タイにおける教育制度、調査対象農村およびチェンライの概要

タイの山地民、参加型開発におけるNGOの役割

プロジェクト・サイクル・マネージメント (PCM) 初級コース

● フィールドワーク

9/30~10/1 名古屋からバンコク経由でチェンライまで移動

10/2~4 チェンライ県庁表敬訪問、プロジェクトサイトの視察

10/5~11 ワーキング・グループごとによるプロジェクトの本調査

10/12~15 フォローアップ調査、プレゼンテーション準備

備

10/16 西村教授及びWGによるプレゼンテーション
10/17, 18 バンコク経由で帰国

参加学生の内訳は、男性17名、女性15名の合計32名で、国籍別では日本21名、インドネシア22名、タイ2名、アルゼンチン、オーストラリア、インド、ニュージーランド、パプア・ニューギニア、台湾、アメリカから各1名であった。専攻別では、国際開発専攻13名、国際協力専攻14名、国際コミュニケーション専攻5名で、全員が博士課程前期の学生であった。一方、チュラロンコン大学からは、通訳 (英語-タイ語-アカ族やラフ族などの現地語) や資料翻訳の協力者として、多数の学生が参加した。

フィールドワークでは、GSIDから江崎光男教授、西村美彦教授、鮎京正訓教授と私の計4名が、タイ側からはチュラロンコン大学経済学部所属のスリッオン準教授、パイサン準教授、プタカン準教授、法学部所属のカノンニット準教授、教育学部所属のスナンチット準教授、タイ王室庁所属のオラスダ女史の計6名が現地調査のアドバイザーとなった。

今年度のOFWは新たな試みとして次の2点を指摘することができる。第一に、前回までは経済・行政・教育といったセクター別ワーキング・グループ (WG) を設定していたが、今回は「農村総合開発」を共通テーマとし、開発プロジェクトが実施されている農村別のWGに分かれ実習を行った。具体的には、タイ王室プロジェクトが対象としている山岳少数民族の村、ビルマ国境に近いNGOの支援する山岳少数民族の村、内務省コミュニティ開発プロジェクトが行われている平地の村及び保健省とWHOが支援する平地の村の4ヶ所とした。

第二の特徴は、プロジェクト・サイクル・マネージメント (PCM) 手法を実習に採用したことである。PCMは開発援助プロジェクトの計画・実施・評価という一連のサイクルを「プロジェクト・デザイン・マトリックス (PDM)」と呼ばれるプロジェクト概要表を用いて管理運営する手法である。

今回はFASIDの協力により、事前研修期間中の5日間をPCM研修にあてた。参加学生は、この手法を用い、村

の調査や進行中の開発プロジェクトを分析した。その分析結果は、現地の村人、NGOや政府職員、チュラロンコン大学関係者に対するプレゼンテーションを通じて報告された。

本年度のOFWは、予算的制約・日程調整等から現地調査期間が従来より短縮されたが、プレゼンテーションに対する評価は非常に高かったと感じている。この理由としては、開発途上国の現場における問題点を論理的に整理・分析するというPCM手法の斬新さと、特定農村の集中的調査を通じて現状をより深く理解することができた結果であろう。このような成果が得られたのは、チュラロンコン大学や現地のNGO、政府関係者などによる様々な面からの協力のたまものとする。

このフィールドワークの成果については、平成11年3月刊行予定の1998年度海外実地研修報告書（Overseas Fieldwork Report 1998）を参照願いたい。なお、来年度のOFWはタイ国北部ランパンにて実施される予定である。

「海外実施研修で考えたこと」

国際開発専攻 M1 丹生 晃 隆

山岳民族ラフ族の人々との交流、チュラロンコン大学の学生との交流、調査地の村まで車に酔いながら通った片道1時間半の道、村人が披露してくれた歌と踊り、準備のためにほとんど眠れなかった発表の前の数日間、いつも心やさしく私たちを迎えてくれたタイの人々、思い出と呼ぶにはまだ早すぎるほどたくさんのが鮮明に思い出される。2週間という非常に短い期間であったが、非常に多くのことを学んだように思う。そんな海外実地研修を私なりに思い返してみたいと思う。

タイ北部の穏やかな気候の下、私達参加者は4つのグループに分かれて実地調査を開始した。方法論として学習したPCM（Project Cycle Management）手法に基づいて、調査地として選択した村の問題分析を行い、農村総合開発をテーマにプロジェクト案を作成することが各グループに求められていた。慣れないグループ作業に戸惑い、思考錯誤の連続ではあったが、その過程で私達参加者は、実地調査の大変さ、難しさを肌で感じる事ができたように思う。

私の所属するグループ1は王室プロジェクト（Doi Tung Development Project）内のHuay Poo Maiという村で実地調査を行った。その村はミャンマーの国境に近い人口150人ほどの小さい村である。Lahu na（“黒い虎”の意）と呼ばれるラフ族が人口の大半を占め、村人達はキリスト教を信仰し、農業を中心とした生活を営んでいた。主要な農産物は米で、その他には生姜、ライチ、茶などを栽

培していた。農業以外には村人の多くが王室営林局の仕事に従事し、収入を得ていた。村には正規の教育を行うための学校がなく、就学年齢に達した子供達は早くから寮設備のある村外の学校で生活しなければならないようである。

村長を始めとする村の代表の人達に会って基礎的な情報収集を行った後、私たちは各戸に調査を行った。この村の一人あたり平均収入が10000バーツ以下であるということは、事前に調べて分かっていたのであるが、実際に村人から話を聞いて、現金収入の不安定さとその少なさにとても驚いた。1日働いてもほんの数百円の収入である。そして、生活の糧となる米などの農産物も気候変動や虫害によってかなりの被害を受けているようである。そのような厳しい生活環境には、私自身随分と考えさせられた。

このように書くと、村人達がいかに貧しい生活をしているかのように考えさせてしまうかもしれないが、実際にはあまりそのような印象は持たなかった。ほとんどの家にはテレビがあるし、まず第一に村人達は活気に溢れていた。調査中、村に一晩泊まって、村人と一緒にバレーボールをしたり、夕食を共にした。村人は私達のために歌や踊りを披露してくれたりとおもてなししてくれた。物質的だけではない豊かさがそこにはあったように思う。

最終日の発表まではとにかく大忙しで寝る間も惜しんでレポートの作成をした。プロジェクト案を作成するにあたり、私たちグループ1は、包括的に収入の増加を図るというアプローチをとった。農産物の増産、手工芸品などの二次的産業の導入、それらを効率的に売るための販売経路の確保、そしてそのために必要な就業訓練、タイ語の教育などを包括的に結び付けた。村人達は私たちの提案を真剣に聞いてくれた。私たちの発表を聞きながらノートを取る村人達を見て、村の発展を心から祈ったのを覚えている。

海外実地研修で調査手法だけでなく、私は多くのことを学んだ。なによりも、私達には一体何ができて、何ができないのだろうか、と真剣に考えた。この問いが問いかけるものは、わずか2週間で答えを出すにはあまりにも大きい。ただ海外実地研修は私にそのように考えさせるきっかけを与えてくれた。私にとって海外実地研修はとても有意義なものであったと思う。

自然と共に生きる山合のアカ族の村

国際開発専攻 M1 杉山 和 恵

私たちのグループは、タイのNGOであるHill Area Development Foundation（HADF）のプロジェクトを調査することになっており、そのプロジェクトサイトの一つであるアカ族と呼ばれる山岳少数民族の村、パカスツジャ

イ村に一週間滞在することができた。タイの北西部には10部族以上、合計約70万人の山岳民族が存在するといわれているが、アカ族はそのなかで4番目に人口の多い民族といわれている。パカスツジャイ村は84世帯、総勢469人のこの地域では中規模の村である。人々の生計の中心は農業、主要作物は米、とうもろこし、豆類などであり、それをHADFの植林プロジェクトや近くの村における賃金収入で補っている。

この村でのHADFの主なプロジェクトは、農業の手法に関するアドバイス、及び植林である。具体的には、過去に焼畑による移動式農業を行っていた人々が、定住を余儀なくされたために集約的農業に切り替えられるよう支援を行っている。特に、山の斜面を利用した等高線栽培、混作、また土壌の肥沃性を保つための作物などを紹介し、農業生産性の向上を図っている。

HADFのもう一つの大きな役割は、市民権をほとんどもたない村民と政府との仲介者となり、村人の市民権獲得への働きかけをすることである。実際に我々が滞在している間も、HADFのスタッフでもある村長はその手続きのために2時間以上もかかる郡役所と村の間を忙しく何度も行き来していた。

我々の調査は、主にHADFスタッフと村人へのインタビューという形で行われた。一軒の家でじっくり話して欲しいというHADFの希望のもと、我々は4つのグループに分かれて一晩一軒づつ訪問した。昼は仕事で皆忙しいので、インタビューは、夕食後7時半から9時半くらいにかけて行われた。

毎晩懐中電灯を持って、アカ語とタイ語の通訳をしてくれる村人に連れられるまま、ある一軒を訪ねた。家はみな高床式になっていて、はしごの下で靴を脱いでから家に入る。入り口に近い方が女性の部屋、その奥が男性の部屋で、我々はいつも奥の方の部屋に通された。村人が協力し合って造られた家はとてもがっしりしていて中は薄暗いが、ほとんどの家には電気がある。

我々の非常にぶしつけなまたナイーブな質問にも淡々とまじめに答えてくれたのには、かえって驚いた。職業、収入、家計、財産、家族構成、生活条件、トイレのあるなしから、言語、文化まで、私の記憶する限りでは、恥ずかしがったり、不快感、不安感、困惑した様子を表すこともなく、それには答えにくい、あるいは答えられないという返答が返ってくることもなかった。かといってインタビュー慣れているという印象もなく、すべてごく自然に、オープンでなごやかな雰囲気で行われたので、まったく状況の予想がつかなくて心配をしていた我々の緊張感をときほぐしてくれたほどである。しかし、女性はたいていお茶や落花生の準備をしたり、家事をしたりであり積極的に会

話に参加しなかった。

今回の調査を振り返って反省すべきことの一つは、PCMという手法を使って調査をする必要上、我々の頭の中に、まず彼らにとっての「問題」を見つけなければいけないというあせりにも似た先入観が色濃くあったという事実ではないだろうか。そのため、どうしても質問が一方的で、しかもネガティブな面に集中しがちになってしまい、HADFの希望していた相互の交流という目的からは程遠かったのは心残りであった。我々としてはプロジェクト提案が前提にあったので、現地調査の目的はいかに彼らの生活を外的な援助によって改善するかを考えることにあった。そのため我々の見方は偏っていたかもしれない。しかし我々にとっての救いは、結果として、この調査の経験が自らの社会を見直す良い機会にもなったということであろう。つまり、変わらなければいけないのは彼らばかりではなく村の外の人間も同様で、多くの人はそのことに気づいていない。それをHADFはこの村を通じて、我々にも理解して欲しかったのではないだろうか。そういった意味では、本当に学ぶことの多い貴重な一週間であった。人々が自然と一体となってシンプルな生活を送っているパカスツジャイ村。めまぐるしい環境の変化に対応していけるような強さをこれからも皆が持ち続けて欲しいと願う。

“Travel certainly broadens the mind”

DID M1 Terence Miro Laufa
(Papua New Guinea)

When I left the shores of my home country Papua New Guinea to pursue post-graduate studies at GSID on October 1st, 1997, it had never crossed my mind that one day I would visit the Kingdom of Thailand. Thanks to the OFW-98 for the unique and wonderful opportunity to see for myself the wonders, pleasures and delights of 'amazing Thailand'. I am making this point in reference to the common group visits to the 'Golden Triangle' area, the Hill Tribes area, Bangkok's Pattaya beach and the like. Some of these places mentioned are of immense interest to the scholarly minds as well as tourists who flock in their numbers year in year out. In any case, the four supervising Professors and the thirty-two students of GSID who participated in OFW-98 contribute to part of that big picture.

Let me point out some fascinating facts about what I learnt from listening, observing and participating in the OFW-98 then. One may have heard about the 'Golden Triangle'. Well, the 'Golden Triangle' symbolises the

unique existence of a shared common border between Laos, Myanmar and Thailand. Although, I have scant knowledge of this area, it was said that a mountain range serves as a landmark for the border between Myanmar and Thailand. Whilst, the mid-point of the Mekong River that runs parallel to the shorelines of Laos and Thailand defines the territorial boundaries of the two countries. At any rate, issues pertaining to the national sovereignty and territorial violations is perhaps best explained within the ambits of International Law as well as the state practice of these countries involved. In this context, state practice refers to the how Laos, Myanmar and Thailand observe, define and acknowledge each others territorial boundaries via enactment of laws or by a tripartite treaty arrangement, if there is any that exists. For convenience sake, the 'Golden Triangle' area is sometimes referred to as a "NO MAN'S LAND".

Another sad fact I learnt was that pockets of the Hill Tribe people do not possess Thai citizenship because most of them hardly, if not can not speak the Thai national language. The Royal Thai Government (RTG) insists that minority groups need to speak the Thai national language to qualify for the privileges of being a Thai citizen. My modest opinion is that this set criterion should be done away with and that minority groups should be recognised as citizens of Thailand. After all, they form an integral part of Thailand.

Anyhow, all I knew about Thailand before the OFW-98 was the popular Thai kick-boxing as well as the terrible stories of overcrowding and high levels of air pollution in the city of Bangkok. While this is disturbingly true for air pollution, I also noted many positive aspects of the Thai society during the course of the OFW-98 from September 30th to October 18th, 1998. In my view,



政府職員から魚の養殖プロジェクトに関して説明を受ける



アカ族の村にてインタビュー

Thailand is very much a compromise-seeking society whereby living patterns are heavily influenced by the Buddhist religion. Here the principles of humility, self-reliance, caring or lending a helping hand to one and another as is manifested in kinship ties are crucial elements that bind and shape the Thai society at large. Frankly speaking, this was something I took for granted in the past, but now I am more appreciative of coming to grips with what Thailand really is, rather than forming conjectures about a country. The last thing I can say is that "travel certainly broadens the mind". Would you agree with me on that? I leave that matter for you to decide.

国内実地研修DFWの概要

杉山悦子

(国内実地研修担当助手)

11月24日(火)から26日(木)の3日間、愛知県東加茂郡足助町において、平成10年度の国内実地研修(Domestic Fieldwork, 以下DFW)の合宿研修を行った。DFWは、2年毎に実施場所を変更しており、平成7年度と8年度は愛知県幡豆郡一色町で、そして平成9年度と本年度は足助町にて実施した。

今回のDFWは、①「現場」を知ることの重要性を実感する、②現地調査、実地調査の基本的な方法・姿勢を会得する、③社会の仕組みについての視野を広げるの3点をねらいとした。また、学生の自主性を重んじ、現地調査の実施に先立ち事前研修(10月28日実施)を開催し、訪問調査先の選別や調査内容の検討を学生自身が行った。その後、学生からの要望に応えるかたちで、プログラムのスケジュールを組むという方法をとった。また、現地調査は訪問先での講義形式ではなく、参加学生からの質問に答えていただくというインタビュー形式を用いたため、現地調査において学生が中心的な役割を果たすことが出来た。

本年度は、教官6名と学生26名(日本人学生12名、中国

人留学生7名、インドネシア人2名、そしてタイ、台湾、香港、アメリカ、ロシアからの留学生各1名)の合計32名が参加した。使用言語は日本語を主とし、必要に応じて英語との通訳をグループ内のメンバーが協力して行った。参加学生は、「地方行政への住民参加」、「観光産業」、「地方行政」、「過疎化」、「老人福祉」という興味関心別に5つのグループに分かれ、一日目の午前中の町役場企画課訪問後はそれぞれグループで独自の調査活動を行った。各グループの訪問先は以下の通りである。足助町は紅葉で有名な観光地であるため、当初は紅葉の時期とずらす予定であった。しかし、今年は例年と比べて紅葉の時期が遅く、研修時期が観光のハイシーズンに重なる結果となった。そのため、

DFW参加者は思いがけず足助の紅葉を楽しむことが出来たが、同時に交通渋滞などの問題点を実感することが出来た。また、このような繁忙期であるにもかかわらず、役場をはじめとして様々な方々が時間を割いて学生の調査に応じて下さるなどの協力をしていただき、DFWが非常に有意義なものとなった。

また、DFWの成果報告と情報の共有を目的として、12月9日(水)に開催した報告会において、グループでの実地研修調査結果の発表を行った。今後、昨年度及び本年度の足助町でのDFWの研修結果をまとめた『国内実地研修報告書 - 1997-1998年 -』を発行する予定である。

	グループ1	グループ2	グループ3	グループ4	グループ5
11月24日	足助町町役場企画課 観光協会	足助町町役場企画課 観光協会	足助町町役場企画課 町議会議員 町役場産業課・町長	足助町町役場企画課 加納板金塗装	足助町町役場企画課 シルバー人材センター 高齢者派遣場所
11月25日	百年草 公民館 移動役場	百年草 三州足助屋敷	J Aよつば 下国谷観光いも堀農園 移動役場	百年草 J Aよつば 河合木材	百年草 老人ホーム足助寮
11月26日	マンリン書店 三州足助屋敷	足助まちづくりの会 香嵐溪	土建業者組合 三州足助屋敷	加東家 吉良屋豆腐	愛知県足助保健所 シクラメンの里

DFW: Ego Blows and Playing Catch

DID M1 Debby Jewell

(United States of America)

The morning of November 24th, 35 members of GSID—students, professors, and staff—piled into vehicles to head for Asuke Township—the location of this year’s Domestic Field Work project. As we were cramming into the vans, the variety of lessons DFW provided were already beginning. (Lesson #1 provided by DFW: Learn to pack lighter.)

Before departure, my team (Team 4) had met a number of times to hammer out exactly what our group study topic was and how we were to go about investigating it, which turned out to be more difficult than it sounds. A group project is an exercise in compromise, listening, debate, and interpersonal skills, and although that may be a trite observation, in practice it is extremely valuable. The group aspect of the research project not only expanded our capabilities, but also heightened our enjoyment of (and possibly our frustrations with) the DFW project. (Lesson #2: When frustrations run high, go with alcoholic beverages.)

As group leader, DFW offered me certain particular challenges. For example, when I offered a proposal to

the group, because the title “leader” was attached to me, the proposal felt somehow inherently weighted. I still wonder if all group members felt they were equally involved in determining the direction of our group project. Consensus is vital to team research, but can feel very elusive under time constraints. (Lesson #3: Work on leadership skills. Or hide better when Cho Sensei is nominating group leader.)

We were in Asuke Township for three days, in which our team conducted six interviews. And it was during this time that DFW provided a personal lesson with the strongest impact: an ego blow in terms of Japanese language skills. It was a major eye-opener concerning my Japanese comprehension. At some points during interviews, I would have only a vague notion of what was being said. Usually in the case of getting lost in a conversation, I’d wait for the next strain of Japanese I understood and then use that foothold to “climb back into” the conversation or lecture. However, in an interview, there is no room for waffling between “getting it” and “not quite getting it”. During DFW, Professor Cho used the metaphor of playing catch to describe the interviewing process; it is a dynamic game and partnership between the interviewer and interviewee. But with my insufficient Japanese ability, I felt somewhat blinded: I could see the general direction

where the ball went-get the general gist of the conversation-but the exact location was hazy, so I couldn't continue the game by responding with the most appropriately corresponding question.

But thankfully, we were playing catch as a team. When one of us faltered, someone else stepped in, and we were able to continue the game. And as DFW presentations are ending and reports are being handed in, I think it is that feeling of a group bond that will be the longest-lasting impression of our DFW experience.

DFWを終えて

国際コミュニケーション専攻 M1 渡辺良子

朝起きると一番に、鮮やかなピンク色が目に飛び込んでくる。DFWでシクラメンの里を訪れた時に購入したシクラメンの鉢である。この花を見るたびに、そこで働いているおばさん達はどのようにしているだろうかと思いを馳せる。

フィールドワークを行ったことがなく、愛知県内を訪れる機会もあまりなかった私は、胸を躍らせながら名大を発った。小一時間もバスに揺られていると、窓の外を流れていくのは木々の緑ばかりである。地方から出てきた私にとって名古屋は「都会」であった。それゆえ、出くわした情景は新鮮であると同時に懐かしくもあった。そして、到着した足助はそんな山に囲まれた町だった。

私たちのグループは高齢者福祉について調査を行った。この分野の整備がまだ不十分だから、ということもあるまいが、訪ねた施設が町の中心部から少し外れていたため、文字通り歩き回った三日間だった。

印象的だったのは「働くお年寄り」である。高齢者に就



三州足助屋敷の民芸品作りを訪ねて

労の場を提供するシルバー人材センターを訪問した後、廃棄物収集運搬作業をしている高齢者の方々とお話しする機会を得た。四日に一度の休みで十分、と豪語されていたが、朝8時前に集合し、3時半までの重労働をこなすのは容易ではない。しかも、この後自宅の農作業に勤しむというのだから頭が下がる思いである。皆とうに還暦を迎えているにもかかわらず、休憩所は活気にあふれていた。だが、いいことばかりではない。収集作業の収入を農機具代に充てているものの、農機具代が高く割に合わない。また、役職を退いてごみ処理を行うことに対し、世間体を気にした時期もあったと言う。しかし「プライドを持って仕事をしている」。力強い口調から、皆充実した老年期を送っていることは間違いと確信した。

こういった明るい部分を垣間見られたこと、そしてなにより五つの施設を訪問して高齢者福祉に携わる方々の生の声を聞けたのは収穫だった。しかし実際に高齢者に会えたのは二ヶ所であり、しかもそれは現役で働いている人々ばかりだった。現に仕事に精を出す高齢者は多く、「足助の年寄り元気だ」というイメージが先行しがちである。だが、シクラメンの里で最後に「辞めたいと思ったことはないか」と質問したところ、今までやってきたから辞めるわけにはいかん、という答えが返ってきた。本心かどうかは別として、この言葉に全てが凝縮されているような気がしたのである。働いている高齢者としてそれぞれの悩みを抱えているだろう。ましてや介護を必要としている高齢者などは表に出ることが少ないのが現状である。

百年草という大きな福祉施設をもつ足助町でさえ、高齢者福祉はますます逃れられない問題となっている。足助のように施設が整っている市町村ばかりではない。いや、むしろそのようなところは少ないだろう。中には県全体が過疎化、高齢化を免れないところもある。高齢化社会は凄まじい勢いで向かってきている。私たちはその波に耐えられるかどうかはまだ確かではないが、その波にさらされるのは疑う余地がないのである。

しかし、その割に私たちは危機感が希薄なのではないかという思いに駆られた。特に若者には「今さえよければ良い」といった感がうかがえる。誰しも年をとっていくのに一人一人の自覚が足りないようである。老人ホームでは家族訪問が少ないと聞いた。いくら声高に理念を説いたところで身内をなおざりにしているようでは展望は開けない。意外に自分の足元は見ないことが往々にしてあるのだが、今回の調査で足助の施設を訪れるたびに、自分の故郷の状況と無意識に比較している自分に気付いた。足助を調査することで日本全体、ひいては我が町の高齢者福祉について思いをめぐらせる機会を得ることが出来たのは幸運だった。

今朝もいつものようにシクラメンに目をやった。あの

おばさん達と共に、まだ現役で働く祖父母の姿が脳裏に浮かんだ。

OFW・DFW公開セミナー 「グローバル時代のコミュニティ 開発—課題と展望—」

国際開発専攻 D2 柳 坪 めぐみ

1998年7月23日に行われたOFW・DFW公開セミナーは、現地で地域開発を学ぶためのプログラムとして実施されている海外実地研修及び国内実地研修の成果を発表し合う場として設けられたものである。それぞれの成果は毎年、参加者内だけでの報告会や報告書という形で発表されているが、今回のように参加者以外の院生や外部の人々に対して公開セミナーの形式で報告することは初めてであった。

また、このセミナーにおける発表者の募集から報告書作成まで全て院生が主体となって行った。実際に準備を進めていく上で、報告者がなかなか集まらないとか、使用言語をどうするかといった様々な問題がでてきて、その都度対応に追われたが、日頃研究を行っているだけでは学ぶことができないことを経験できたと思う。

運営委員会が正式に活動を開始したのは同年5月のことであり、関係者は忙しい中、時間を縫って集まり、目的や議題、プログラム、セミナー全体のシミュレーションなどについて意見を交わした。前述したような問題のうち、特に人集めが困難であった。セミナー開催時期が夏期休業直前であり、しかも前回のOFWやDFWからかなり時間もたってしまうため、皆の関心を引くことはかなり困難であった。しかし、最終的には、8名の院生が報告をしてくれることとなり、さらに2名の院生が通訳を引き受けてくれることとなった。

セミナー当日のプログラムは第1部と第2部に分けられており、その第1部のうち、午前中はOFW、午後はDFWに関連した研究について発表がなされた。発表と質疑応答合わせて1人あたり30分弱という限られた時間の中での報告となってしまったが、それぞれ時間内で非常にうまく報告がなされた。

第2部では、足助町役場の職員の方々や客員研究員のコメントを頂いた後、参加者全員でディスカッションを行った。行政の現場の意見や地域開発において学術的な意見をうかがうことができたのは有意義であった。しかし、改善すべき点として次のことが挙げられた。発表者、コメンテーター及び参加者は「地域開発」を考えるという視点からは共通していたが、各々の専門分野が多方面に渡っていたた

め、「地域開発」を考えるアプローチも様々であり、各々の専門分野からの分析がもちだされたことである。これは他専門分野の人々が視野を広げる点においては有益であったが、一方でディスカッションの際に、分析視点が広すぎて活発な議論になりにくかったという点も否定できない。主催者側が、予め共通するテーマを設定し、それに沿ってディスカッションを進行するようにしておけば良かったと考えられる。

セミナーの成果をまとめたものとして、今年2月に報告書が刊行された。これはセミナーにおける報告論文と、それに対するコメントで構成されている。限られた時間内での報告だけでは十分発表者の意図をくみ取ることができなかった点もあったと思われるので、改めてこの報告書を参考にさせていただきたい。また、5名の方々のコメントは、今後の研究にとって非常に有効であり、重要な提言として受け取ってほしい。

終わってみると、反省すべき点はあるものの、セミナー修了後に書いていただいたアンケートには、このようなセミナーは制度化して、毎年行うべきだという意見も出され、このような機会を与えて下さった大勢の方々に感謝している。今後も、今回のセミナーの反省点や意見が、企画・運営・報告の上で反映される院生主体のセミナーが行われていくことを期待している。

第7回 国際開発関係大学院 研究科長会議 開催

第7回国際開発関係大学院研究科長会議が10月30日、名古屋大学国際開発研究科で開催された。会議には、8関係大学院研究科長、文部省から学術国際局井上国際企画課長、同教育文化交流室川野辺海外協力企画係長、大学課手島大学院係長、菅野国際開発高等教育機構（FASID）事務理事、甲斐国際協力事業団（JICA）人事部調査役、梶国際連合地域開発センター（UNCRD）所長が出席し、「基幹



講座」と「協力講座」の今後の望ましい関係、「論文博士」の授与規定等について活発な意見交換が行われた。引き続き、梶UNCIRD所長から、地域に存在する国連機関としての活動等の紹介があり、開発・協力に有用な人材の育成を掲げている関係大学院の大いなる関心と呼んだ。

会議終了後、井上国際企画課長により我が国のODAを取り巻く動向について、豊富な海外体験を交えた示唆に富んだ講演があり、参加者は国際開発関係大学院として多くの課題、役割、国際貢献を改めて認識した。

なお、今後の同会議の開催は年2回とし、秋季（第1回）は名古屋大学で開催し、第2回目は輪番で原則として3月に開催することとなった。次回は3月19日に横浜国立大学で開催する。

平成10年度 外交講座

去る2月12日（金）本研究科多目的オーディトリウムで、「外交講座」が開催されました。

「外交講座」とは、平成6年度より、外務省の現役省員、又は大使経験者を全国の大学に派遣し講演を行い、国際社会における我が国の役割と責任、次代を担う大学生・大学院生に流動する国際情勢や外交問題について理解を深めるために行われているものです。

今回、本研究科で「第2回アフリカ開発会議（TICAD II）の成果」と題して、前第2回アフリカ開発会議日本政



府代表・前エジプト大使 片倉邦雄氏の講演があり、アフリカの持つ多くの問題点、それに対する日本の関わり等について経験を踏まえて興味深く語られ、聴講者の興味を引いた。

なお、本講演会には前研究科長の森嶋先生も出席された。

また、アフリカ出身の当研究科留学生等から積極的な発言があり、非常に有意義な講演会となった。

当日の資料が若干ありますので、必要な方はGSID事務室までおこしください。

ごみの減量とリサイクル

名古屋大学は、2月1日から名古屋市の意向を受けて、ごみの減量とリサイクルの推進を行うために、学内から出るごみの分別回収を始めました。国際開発研究科（GSID）では、紙類、空き缶、空き瓶、ペットボトル、燃えるごみと燃えないごみの6種類で「分別」を始めました。また、紙類はさらに5種類に分けました。これまで、「燃えるごみ」と「燃えないごみ」だけに分けて「捨てていた」ごみを分別してリサイクルへ。一言で「分別」といっても、いくつかの学部では以前より始めていますが、GSIDでは2月1日から、また、分別を行っている家庭がほとんどですが、GSIDの研究室等では2月1日からです。スタート直後は、「どこへ入れる？」と戸惑った教職員・学生が多かったと思います。しかし、実施から3週間を過ぎようとしている現在では、分別が進み実施前と比べて「燃えるごみ」が目に見えて少なくなっています。ダイオキシン汚染等の環境問題が、マスコミ等で大きく取りあげられ、環境問題に関心を示す人が多くなっていますが、身近なところから「分別」し、資源化可能なものは「リサイクル」を行っていくことも大切です。GSIDでは、この2月からはじめたばかりの分別回収ですが、より一層分別からリサイクルを進めていきます。

国内研究員変更のお知らせ

大野 盛雄（中近東文化センター理事）ご病気のため

加藤 栄：大東文化大学等非常勤講師

研究課題：ベトナムにおける表現の自由

期 間：平成11年1月1日～平成11年3月31日

出版物案内

最新 国際開発研究科発行の印刷物

『国際開発研究フォーラム』11

荒山 裕行「社会主義市場経済の進展と郷鎮工業の環境問題」

Roisin BOYLE, “Aid Co-ordination between the European Union and Its Member States”

Gueye Moustapha KAMAL, “Regional Integration and Foreign Direct Investment in ASEAN: Process of Change in the Legal and Policy Environment”

Niculina NAE, “Specific Problems in Cross-Cultural Communication: A Case Study in Romanian and Japanese Translations”

兼安シルビア典子「外国人被疑者・被告人における通訳の問題 —外国人の通訳を受ける権利と刑事手続き上の問題点を中心に—」

川瀬 千春「毛沢東『延安文芸座談会の講話』前後の『抗戦年画』制作について

坂井田直美「アメリカ合衆国の製造物責任訴訟における公的安全基準の効果と第三次不法行為法リステイメント：製造物責任第4条—着衣着火ケースによる検証—」

富田 哲「日本統治時代初期の台湾総督府による『台湾語』の創出」

尹 鐘彦「韓国企業の海外直接投資：その推移とM & A経験」

『国際開発研究フォーラム』12 岩崎先生退官記念号

岩崎 一生「商事仲裁との40年」

Michael Marks COHEN, “Particular Charges in Carriage of Goods by Sea and Marine Insurance”

Judd EPSTEIN and Jeffrey WAINCYMER, “Dispute Resolution in International Commerce: Reflections on Procedural Justice”

Luke NOTTAGE, “New Zealand Law through the Internet: The Commonwealth Law Tradition and Socio-Legal Experimentation”

REN Xiao, “Some Reflections on Development and Democracy”

澤井 啓「仲裁人の懲罰賠償権限」

WAKABAYASHI Mitsuru and CHEN Ziguang, “Managerial Skills for Asian Managers: Comparisons Based on Managers in Japanese, Chinese and

Filipino Corporations”

木村 宏恒「上からのマイクロクレジット-IDT（インドネシア貧困村撲滅計画）の教訓—」

久保田 隆「決済システムにおけるリスク対策の全体像とその課題」

長田 博「アジア型通貨危機と防止策」

田島毓堂「比較語彙研究の構想と概要—異文化比較・理解のために—」

山田 耕士「言語コミュニケーションにおける論理学—トマス・ウィルソンの場合—」

安田 信之「オーストラリアの人権委員会の紛争処理手続：人種差別事件を中心に」